



枯枝に鴉のとまりけりあきの暮
桃青翁
(九久平町松生島)



郭公招くか麦のむら尾花
翁
(小坂町白髭神社 文政三年)



木のもとに汁も鱈も桜かな
はせお
(拳母神社 寛政十一年)

目次

- ・「郷土の俳人展」より・初公開資料紹介「卓池門俳句奉納額」「ゆきひろ日記」—— 2
- ・郷土資料館レポート・民俗資料館の紹介—— 4
- ・民俗資料館(民家)の構造と特徴 すのこ天井とくぐり戸—— 6
- ・埋蔵文化財ってなんだ?—— 7
- ・文化財シリーズ・資料館ニュース—— 8

「卓池門俳句奉納額」・「ゆきひろ日記」



奉額	當所願主六花園里鴻
うめもらひ隣へもまた這入りけり	里敬
巢立から揚る気さしや鴉の子	翠錦
風下へ皆かたまるや春の鴨	吾竹
う八 <small>すべ</small> 江りする程降ぬ春の雪	鷹足
啼きもついそこ <small>おとりか</small> ろにき <small>か</small> 籠	奇柳
道端て立てば山にもきしの声	青可
挨拶に人から見ゆる柳かな	汝篁
片順にひらくでもなし梅の花	鷺洞
鶯や供をかえして只一人	二溪
筏くむ河辺へ迫るや春の月	篤司
さぐり足する迄暮れぬ花の陰	田鳳
喰もの <small>う</small> へに雨降る花道かな	卓池
炭 <small>すみ</small> 籠 <small>かま</small> をはじめてのぞく花見哉	里鴻
童子の花に登るや幕の内	李幹
天保十二歳 かのとうし春日	

初公開資料①「卓池門俳句奉納額」

この額は、現在の豊田市鴛鴨町にある遍照寺に天保12年(1841)に奉納されたものです。これを奉納したのは、鴛鴨村の俳人兵藤里鴻です。里鴻は、本名を兵藤松兵衛といい別に六花園とも号していました。俳諧は岡崎の鶴田卓池の門人で、天保5年(1834)に出された句集「すきぞめ集」はじめ、「みづおと」天保6年「俳諧まくら紙集」天保9年などに句が見られる俳人です。この遍照寺の東隣に住んでいたと伝えられています。

この額は、縦42センチ横120.8センチで画面部分は縦31.6センチ横110.2センチです。

左上に満開の桜が描かれ、花見見物に出かける人々が描かれています。二本差しのお侍、姉さんかぶりの女性、荷物を背負った男、背中の瓢箪には酒が入っているのでしょうか。また連れ立って歩く町人衆は、扇子を手にいかにも楽しそうです。今にも花見見物に出かける人々の声が聞こえてくるかのようです。

ここに掲げられた句は、師の卓池とその門人のもので、そのほとんどが近郷の俳人(このうち太字は現在の豊田ゆかりの人)です。詳細の解らない人も居ます

が、岡崎の卓池、汝篁、甲斐の田鳳(その年、卓池の所に寄寓していた)がいます。掲げられた句はすべて春の句です。

では、どうしてこの額が奉納されたのでしょうか。額をよく見ると里鴻と李幹、最後の二人の句は、他の人の句より低く揃えて書かれています。この二人は同じ鴛鴨村の人、李幹は酒造家です。春の一日、師・卓池を招いて花見の宴あるいは句会を催したのでしょうか。そしてその宴に招かれたのが、この額に名前の載っている俳人たちではないでしょうか。花見の席では句も詠まれたでしょう。しかしここに載る句の中には「もち花集」天保8年に見られる句が5句、「みづおと」天保6年にみられる句が1句あります。そのことから、各人の春の秀句を選んで記念に奉納したのではないかと想像されます。一方、同じ鴛鴨村にある若宮八幡宮には天保7年、この地域の飢饉と近郷でおきた百姓一揆(加茂一揆)の様子を伝える棟札が遺されています。凶作から5年、豊作と平和を願って観音堂に額を奉納したと考えるのは深く考えすぎでしょうか。いずれにしても、地域の俳人グループの繋がりを垣間見ることのできる資料です。



「ゆきひろ日記」は、菅沼鷺洞の日記です。「ゆきひろ」は雪廣と書き鷺洞が生まれた九久平村の地名で、鷺洞の別号を雪廣舎といいました。(現豊田市九久平町の字名)

文化10年(1813)に生まれた菅沼鷺洞は、本名菅沼左司馬のち彦衛といいました。江戸時代、九久平村は旗本鈴木市右衛門家の領地でしたが、菅沼家は領主から武士の格式が与えられ陣屋で国代官を勤める家柄でした。

俳諧は岡崎の鶴田卓池の門人、里鴻と同様、門人関係の句集に多くの句が見られます。

現在、豊田市郷土資料館に寄託されている菅沼家資料・豊田中央図書館所蔵和装本の鷺洞旧蔵資料の中には、句集の他、鷺洞の俳句関係資料が多くあります。鷺洞が遺した原稿、自ら句を書き添削をしてもらった「雪廣独吟 百韻」、「初ふゆの句」などで、こうした資料の一つが「ゆきひろ日記」です。この日記は、鷺洞が世間で見聞きした様々な事柄を書き留めたもので、村の出来事や仕事上の出来事、卓池の庵・青々処で出会った様々な人からの情報も書き記されています。表紙に「草稿」とあることから鷺洞はこの日記を出版しようと考えていたものと思われます。今回はこの中にある俳諧についての内容から興味深いものを紹介します。

一つは、卓池が鷺洞の質問に答えた「発句と成りうる基準について」の記述です。江戸時代の俳諧は連歌が普通でしたが、発句というのは連歌の中での最初の句のことです。これが独立した文芸として扱われました。(現在の俳句のこと)鷺洞は、この連歌の中の句と独立した句との違いを尋ねたのです。

「一 卓池老人に発句なる成ざる之境、尋ねしかば
草の葉を 落ちるより飛 蛭哉
鏝持の 猶ふりたつる 時雨哉
右等の句
草の葉を ころがり落る 蛭哉

鏝持の ふりたてゝ行 しくれ哉

にては、面白しなし、飛といふ字、猶の字にて、其句の手柄あって且余情を含、是発句になりし処也、能々味ふべしと申されし」

師である卓池は句の例をあげて説明しています。俳句関係の資料は、詠まれた句は伝わっても、このような句の違いや鑑賞についての事までわかることは少なく、貴重なものといえます。

またこの日記には、次のような記述もありました。
「一 亡師追善として、夕沢集上梓となりし、幾程なく岡崎え罷りし所、市中古道具屋に古本類とともに夕沢集出し有之、右は門人成人賣代なせしや、又は余人其筋より譲り請てひさぎしや、兎も角も板になりし、其年の内に斯る次第本意なき事に思ひし、併し斯言予も世の渡らひなりかね、翌ケ日賣代なさんも知れずかし」

卓池の追善集「夕沢集」が刊行されたその年の間に、岡崎の古道具屋に本が売られていたことを歎いていま



す。しかし文末で生活に困ったら自分も同じ事をするかも、と述べている辺りは、当時の庶民生活の現実を述べているといえます。本を買うことができる人々はそれほど多くはいませんでした。

こうした内容から当時の俳人の生き生きした姿を垣間見ることができます。

豊田市郷土資料館では、4月14日まで「郷土の俳人展」を開催しています。ここで紹介した資料をはじめ、この企画展では新しく市内で見つかった卓池の短冊や屏風など、江戸時代後期、市内で活躍した俳人の載る句集等を展示紹介しています。

(伊藤智子)

民俗資料館の紹介



みなさんこんにちは、私は豊田市郷土資料館の民俗資料館です。

私は今から270年くらい前に歌石村(うたいし 現豊松町歌石地区)の庄屋の家として建てられた、お百姓さんの住宅だったんです。屋根は萱葺きで、柱にベボの木を使っているので、とてもめずらしいということで、郷土資料館にやってきました。もう30年くらいここにあります。今日は、前のご主人、平岩さんの孫の沙希ちゃんとお友だちが訪ねてきてくれました。沙希ちゃんのおじいさんたちの子供の頃のことを、話してあげたら、とてもよろこんでくれました。

最初に、くぐり戸を入ると、土間になっているんだ、とっても広いだろう。土間は玄関というよりは農作業をする部屋だったんだよ。むかしはよおなび(夜なべ)といって、縄やムシロを編んだり、いろいろな農作業をしたんだ、もちろん、忙しい時には家族全員で仕事をしたんだ。土間の奥にはかまどや流しがあって、ご飯を炊いたり、煮炊きをしたんだけど、今みたいにガスなんかなかったから、薪に火をつけたり、火を消さないように、とても大変だったんだ。土間の中に、昔の生活の道具が展示してあるだろう。水おけや背負子、せんたく板などのくらしの道具や千歯こきや唐箕、だいがらなどの農具があるから、使ってみてごらん。当然、水道や電気なんてなかったから、全部自分たちでやったんだよ。どうだい？ おじいちゃんのごどもの頃の生活が少しはわかったかな。



いろりは家族のだんらんの場所だったんだ。薪を燃やして、明かりや暖房をとったり、鍋を煮たり、お湯を沸かししたりした



んだ。だから家の中はススで真っ黒けさ。食事は家で作った野菜や漬物が多かったけど、たまにはうさぎ汁やたぬき汁などのごちそうもあったね。少し暗かったけど、食事のあとには、おじいさんのおじいさんがいろいろなお話をしてくれて、それを聞くのが楽しみだったんだよ。

そうそう、おもしろいものがあるんだ。これは山かごとって、今でいえばタクシーといったところかな。乗ってごらん。・・・なんだ、ふらふらしてるじゃないか。肩が痛いつて？ むかしは、駕籠(かご)に人を乗せて何キロも走ったんだぞ。それじゃあ、駕籠かきにはなれないな。

ハハハ・・・



奥の部屋には、越中富山の薬箱や炭火アイロン、弁当箱、あんどんなど、生活に使ったものやお祭り、年中行事、子供の遊び道具などが展示してあるんだ。



今は、お正月ということで、獅子舞いの道具が飾ってあるだろう、え！恐いって。そんなことはないさ。

獅子は、^{せいじゆう}聖獣といわれ、悪い病気や災難から人を守ってくれるし、獅子に頭をかまれると勉強がよくなるようになっていわれているんだよ。



今度はみんなで遊ぼうか。そこに、万華鏡やだるま落とし、おはじきがあるだろう。好きなものを選んでごらん。遊び方がわからないって？



じゃあきょうは、おはじきの遊び方を教えてあげよう。みんなでなかよく遊ぶんだよ。

まだ、いろいろな遊びを教えてあげたいけれど、もう遅くなったから、また今度にしようね。

きょうはみんなが、遊びにきてくれて、とてもうれしかったよ。

遊びにきてくれたお友だち

平岩沙希ちゃん(豊松小) 蟹 愛美ちゃん(豊松小)
蟹 加苗ちゃん(岩倉小) 蟹 未岬ちゃん(豊松保)

発掘調査速報

○ 吉兼1号窯〔白山町吉兼〕

平成13年11月から白山町吉兼の吉兼1号窯を発掘調査しています。5世紀から14世紀までの800年間に三好町、名古屋市の天白区、緑区を中心に発展した猿投西南麓古窯跡群(猿投窯)に属する古窯です。

調査は日赤看護大学の建設に先立つもので、9,500㎡を試掘し210㎡に窯跡が広がっていることが分かりました。現段階では樹木の伐採をせず、木々の生い茂る中で調査をしているので、冬の時期は3時くらいには薄暗くなってしまうようなところです。

窯跡は吉兼池に面した尾根の東の斜面に造られており、窯から出た灰を捨てた「灰原」が確認されました。灰原からは須恵器や灰釉陶器片が発見されています。須恵器は碗・坏・盤・甕が多く、灰釉陶器は碗・皿・瓶類が多くみられます。また、窯道具として三叉トチン、四叉トチン、コップ状ツクといったものが見つかっています。

12月には窯本体の遺構が発見されました。ほとんどが削平され残りが悪い状態でしたが、赤茶色に焼けて、硬く締まった窯の壁や床を確認することができました。窯跡は出土した遺物から平安時代の初頭(9世紀前葉)に使用していたと思われます。

今後の調査でさらに全容が明らかになってくると思われます。楽しみなところです。



窯跡本体が確認されました

すのこ天井とくぐり戸

ここでは、前掲の民家の構造、とくに「すのこ天井」、「くぐり戸」について紹介します。この民家は郷土資料館へ移築される前は豊松町の平岩求氏の住宅でした。豊松町は、豊田市東部にあり、三河高原に連なる山間地で、巴川の支流仁王川沿いは特に急峻な地形をしています。昭和40年代ころまでは谷あいの小規模な水田と畑、山林に生活の糧を求めた西三河北部にみられる典型的な農山村集落でした。この民家が建てられたのは江戸時代中期で、当時、平岩家は歌石村の庄屋でした。

建物の規模は間口7間(12.87m)、奥行き3間半(6.4m)です。間取りは土間、居間(勝手・台所)、なか間、座敷、奥の間に分かれ、土間と居間(板敷)はそれぞれ2×3間半の同じ広さですが、仕切りはなく同じ空間となっています。座敷は1間半×2間で床と押入、奥の間も同じ広さですが床と押入は付きません。なか間は1間×3間の狭い長方形の部屋で、居間と座敷、奥の間を来客など必要に応じて分離、接続する機能を有していたと思われます。

建物の正面は障子、雨戸がありますが、東西の側面と北側の三方は真壁しんかべです。入り口は大戸にくぐり戸がつき、各間仕切りは板戸になっています。居間は板敷で土間から1尺ほどの高さで比較的低いものです。なか間より奥は畳が敷かれ、土間と居間の天井はすのこ天井となっています。



すのこ天井は、一般的には「大和天井」、「つし」「すがき」と呼ばれ、竹や木材を敷詰めたすのこの上に菰、蕙、藁などを一面に敷き、泥土を練って塗りつけて仕上げたものです。これは奈良地方で盛んに用いられた天井の構造で、東海をはじめ九州南部、近畿、関東平野など広い地域で「つし」とよばれています。語源は「辻」からきており、日の辻(正午)に太陽が最も高い位置にあるところから、辻が高いところを意味するようになったようです。

平岩家の場合、土間の天井の奥半分には直径7～8cmの細丸太、居間の天井には女竹を敷詰め、その上に菰を敷き、粘質の赤土を塗ってかためてあります。初期の目的は防火と保温であったと考えられますが、のちに物置や養蚕などの作業場として利用されるようになったようです。ここで注目したいのは、伝統的な草葺屋根内部に土が用いられていた事実です。古代の竪穴住居跡を発掘していると土間や埋土から焼土や固まりになった粘質土が発見される例とつながるのではないのでしょうか。近年、論ぜられている土葺屋根の存在とその形態に大いなる示唆を与えてくれます。

くぐり戸は、土間の入口の大戸に付けられた小さい引き戸です。大戸は入口幅(通常1間)の大きさの頑丈な1枚構造の引き戸で、その中



に3尺(90cm)程のやや細長い戸が設けられています。普段、大戸は閉めてあり、臼引き(糊摺り)など大がかりな作業や人の多く集まる冠婚葬祭時には臨時的に開かれますが、日常の出入はもっぱらくぐり戸でした。大戸の土台は普通1尺ほどの太い材木で、土間と外界を厳と画しており、土間に入るにはこの土台を跨いで、3尺のくぐり戸を、かがんで入らなければなりません。くぐるとはくぐりから転化したことばで、狭いところを体をかがめて通過することをさします。この小さなくぐり戸は、まさに外界から家という異空間に入り込む魔法の扉なのです。

土間と三面に設けられた真壁とつし天井、くぐり戸から竪穴住居内部と同じ空間を連想させます。すなわち半地下式の竪穴住居が地上に浮き上がった状態を考えればよいわけです。竪穴から平地住居に移行する過程で真壁の発達がはたした役割は見過ごせないでしょう。

こうした身近な民家にも、竪穴住居の研究や復元の素材があることを、一例として紹介しました。

(松井孝宗)

まい ぞう ぶん か ざい 埋蔵文化財ってなんだ？

埋蔵文化財(略して「埋文(まいぶん)とも呼ばれます)とは文字どおり、土の中に埋もれている人間の生活や活動の痕跡のことを指します。それは一般的に、土器や石器など持ち運びが可能な「遺物」と呼ばれるモノと、住居や墓などその場所から動かない「遺構」と呼ばれるアトから構成される「遺跡」として捉えることができます。

「遺跡」というと、ニュースなどでしか見ることのできない遠い存在のように思われがちですが、埋蔵文化財は私たちの身近にある文化財なのです。

豊田市内には、現在わかっているだけでも約480箇所の遺跡(うち 現存する遺跡は約290箇所)があります。この豊田市内の遺跡の数は、名古屋市や瀬戸市などに次いで、愛知県内でも上位に位置しています。山や川・台地や低地など地形の変化に富む豊田市域は、最も古い時代では今から約1万6千年前の旧石器時代から各時代を通じて人間の生活や活動の痕跡を見ることができます。

豊田市内のどこに遺跡があるのかは、豊田市郷土資料館編の「豊田市遺跡地図」でご覧になることができます。現在とは環境や生活の方法が異なる部分も多いので一概には言うことはできませんが、人間が利用しやすい場所にはやはり遺跡があります。遺跡地図をご覧になると、現在皆さんが生活をしている場所のすぐ近くに、また意外な場所に遺跡があることがわかります。

身近に存在するとはいっても、遺跡は土の中に埋まっていますので、通常ははっきりとその姿を目にすることができません。ただし、私たちがそこに語りかけるとき、遺跡は実にさまざまな情報を私たちに教えてくれます。そして遺跡の情報を最も引き出す可能性が高い方法として、発掘調査が行われています。

これまで郷土資料館だよりでも速報としてお伝えしてきたように、発掘調査によってさまざまな遺構や遺物が姿を現し、その土地に刻まれた生々しい人間の営みを示してくれます。また、発掘調査によって新たな遺跡が発見されることもあります。

しかし、近年行われる発掘調査のほとんどが、開発に伴って壊されてしまう遺跡を記録保存という形で残



発掘調査の様子(花本遺跡)

すための緊急調査です。遺跡は、一度壊されてしまえば二度と元の姿には戻らないタイムカプセルです。発掘調査によっていろいろな情報を得る代わりに、遺跡は失われてしまいます。調査を担当する者は、調査と保存との板ばさみとなり、辛い立場に立つ場面も少なくありません。

しかし、埋蔵文化財(遺跡)に親しむには、発掘調査が行われる事を待つ必要はありません。例えば、郷土資料館にたち寄って、発掘された遺物などを見学するのもひとつの方法です。また、史跡として保存されている場所(現在市内に計16箇所)を訪ねることで、百年単位・千年単位の過去に直接触れることができます。

埋蔵文化財を通じて知る過去は、決してそれ単独で切り離された過去ではなく、現在にまで続いている地域の歴史です。これから迎える暖かい季節には、私たちの生活の足元に眠っている、身近な文化財としての埋蔵文化財を訪ねて見るのはいかがでしょうか。もしかすると、地表に現れた遺物たちに出会えるかもしれません。



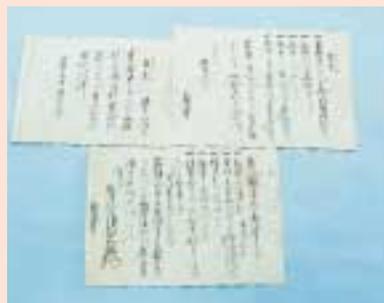
国指定史跡・舞木廃寺塔跡(舞木町)

今川義元文書

篠原町の集落から約1 kmほど東に、照葉樹の山に囲まれた曹洞宗伏竜山永澤寺(ようたくじ)があります。この寺院は文明元(1469)年、総持寺5院の一つ大徹派伝法庵系の礼応俊茂が開創したと伝えられています。かつては、現在の地よりも山奥の弥陀返しの地に寺院があったとの伝承があり、火災に遭い、慶安元(1647)年に現在の地に再建されました。寺号も永源寺から永澤寺と改められています。

「今川義元文書」は、永澤寺の庫裏を改築するときに、先代の住職により、偶然、発見され、昭和50年に市の文化財として指定されています。天文19年の「禁制」は義元文書としては、市内で最も古いものです。

この頃、三河に勢力を拡大しつつあった今川義元は、天文18(1549)年に安祥城を陥落し、西三河地方一円を支配下におさめました。新しい支配者として三河で検地を行い、社寺の本領安堵や寄進をし、また在地の国衆などに本領を安堵して家臣団に編入しています。



文化財シリーズ

39

今川義元文書

今川義元禁制(天文19年) 左上
今川義元禁制(弘治3年) 右上
今川義元安堵状(弘治3年) 下

禁制とは、地域の支配者が領域内の秩序を保つために禁止事項等を文書で命令したものです。この文書では山林を伐りとったり、乱暴をしたりすることを禁じた内容となっています。寺領安堵状には「治部大輔」(義元の官名)の自筆と花押があります。この頃に、このあたり一帯まで今川家の支配が及んだことがうかがえます。

資料館NEWS

○1月26日は「文化財防火デー」

1月26日は「文化財防火デー」です。昭和24年、奈良法隆寺の金堂壁画を修復作業中に火災、焼失するという大事件がおこりました。これを契機に昭和25年に「文化財保護法」が制定され、この日を「文化財防火デー」として防火意識の高揚が図られることになりました。豊田市では、1月22日に医王寺(矢並町)、23日に永澤寺(篠原町)、25日に六鹿邸(高岡町)、29日に高月院(松平町)において防火訓練が実施されました。

訓練は消火器による初期消火訓練、消防隊による建物への消火訓練、宝物の運搬、人命救助の訓練が行われました。貴重な文化財を火事から守ること、万が一の時の対処について学ぶ機会となりました。

○「あいづまの人物誌」が発行されました。

逢妻地区の郷土史研究グループ、逢妻史跡研究会から「あいづまの人物誌」が発行され、逢妻地区の歴史に貢献のあった人々が紹介されています。残部に限りがありますが、ご希望の方は、逢妻史跡研究会(会長 近藤 三善 31-4002)までお問合せください。



利用案内

開館時間 9:00~17:00

休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館) 年末年始

入場料 無料(ただし特別展開催中は有料となります)

交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分

名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分

愛知環状鉄道「新豊田駅」より北へ 徒歩17分

■豊田市郷土資料館だより No.39■

平成14年3月15日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎(0565)32-6561 FAX(0565)34-0095

E-mail: rekihaku@city.toyota.aichi.jp

URL: http://www.toyota-rekihaku.com